



知床科学委員会 しんぶん

海域ワーキンググループ No.10

海域ワーキンググループとは？

海域ワーキンググループでは、様々な分野の専門家が集まり、漁業、サケ、海棲哺乳類などの生物を総合的に含めた、知床半島の海域の管理について議論しています。

令和2（2020）年度の活動内容

知床半島の海域の保全に向けて、令和2（2020）年度は会合を2回開催しました。

第1回 令和2（2020）年7月31日 羅臼町

第2回 令和3（2021）年2月19日 札幌市

＜話し合われた主な内容＞

○知床の海域に関する調査（モニタリング）結果について

今年度は長期モニタリングの10年という一区切りのため、10年間全体の調査結果を用いて評価を行いました。

◆◆◆◆◆近年の知床の海について◆◆◆◆◆

①海洋環境

- ・海洋水温は、おおむね平成30年（2018年）までの平均水温とほぼ同様な季節進行を見せましたが、7月後半から8月前半、9月前半はやや高めでした。海氷も平年と同程度、汚染物質に関しては低いレベルでした。

②魚介類

- ・海岸域における生物相調査結果は、遺産登録時と比べて顕著な変化はありませんでした。ただし、一部外来種の定着が確認されたため、今後注意していく必要があります。サケ類・スルメイカ・スケトウダラは漁獲量には減少傾向がみられます。

③海棲哺乳類

- ・いずれの種・種群も特筆すべき増減はありませんでした。

④鳥類

- ・ケイマフリは個体数が維持されていますが、オオセグロカモメ、ウミネコ、ウミウは遺産登録時に比べ、数が減少しています。オジロワシの繁殖数・繁殖成績は横ばいかやや上昇傾向、また海ワシ類の越冬飛来数は横ばいでした。

⑤地域社会

- ・過去10年ほどの観光入込客数は減少あるいは横ばいでしたが、主要な世界遺産関連施設の利用者は増加しています。外国人観光客・宿泊者数も大幅に増加しました。地域人口と就業者数については、長期的な減少傾向が継続しており、漁業生産および漁獲金額も、過去10年ほどは横ばいあるいは減少傾向が続いています。

知床の海の具合を調べているんだ！？

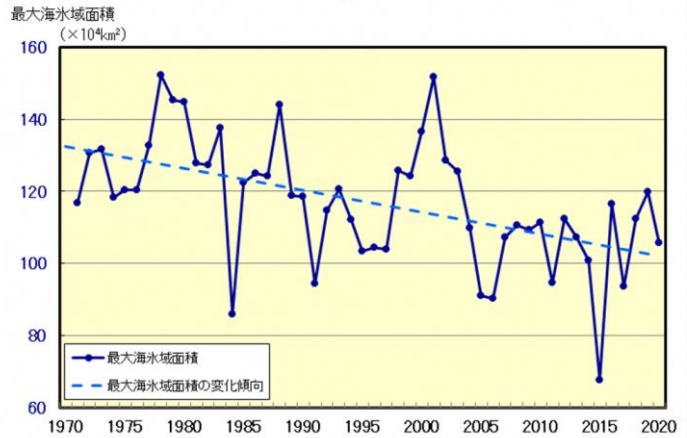
全部で16項目なんだよ！

モニタリング結果からわかること（海水について）

オホーツク海の最大海水域面積は長期的に見ると減少しており、10年あたりオホーツク海の全面積の3.9%の海水域が消失しています。

北海道沖合への海水の南下・到達は、目視によると2018-2019年では平年と同程度、海水の後退は1週間ほど早かったです。

海水面積データは、知床海域の海水状況の把握において重要な情報であるため、今後も変化を注意深く監視していく必要があります。



オホーツク海の海水域面積の経年変化(昭和46年～令和2年)
出典: 気象庁ウェブサイト

	1月	2月	3月	4月
2019/20年		●	★	◆
2018/19年	●	★	◆	
2017/18年	●	★	◆	
2016/17年	●	★	◆	
2015/16年		●	★	◆
2014/15年	●	★	◆	
2013/14年	●	★	◆	
2012/13年	●	★	◆	
2011/12年	●	★	◆	
2010/11年	●	★	◆	
1981～2010年平均	●	★	◆	

● : 接岸初日 ★ : 最大海水日 ◆ : 離岸日

出典: 第一管区海上保安本部「海洋概報(海水編)」 「海水速報」

海域WG座長退任挨拶

～知床海域の未来に向けて～

2005年の知床世界自然遺産登録時に、海域WGが発足し、座長として15年が過ぎました。長い間、本当にお世話になりました。2021年度からは、新座長（山村織生北大准教授）にバトンをお渡しします。知床の海が将来に向けて豊饒な海であることを願って、科学委員会委員長の立場でサポートしてゆきます。

（海域WG座長：桜井泰憲）



～知床海域の今～

知床は、北半球で季節海氷が到来する最も低緯度に位置しており、サケなどを通した海洋生態系と陸域生態系間の物質輸送の連環を有し、両生態系とも豊かな生物多様性を誇る土地です。漁業と観光が地域経済を支えています、2020年春からのコロナ感染拡大に伴う観光客の激減など、今後の地域経済への影響が懸念されるところです。

（海域WG座長：桜井泰憲）

会議の内容をもっと知りたい方はこちら

知床データセンター
<http://dc.shiretoko-whc.com/>

これまでのモニタリング結果や、会合での資料なども
ご覧いただくことができます。

◆お問い合わせ先◆

北海道環境生活部環境局自然環境課
〒060-8588
札幌市中央区北3条西6丁目
電話 011-231-4111（代）
内線 24-357

<令和3年（2021年）3月発行>

オホーツク海を研究していると、絶妙な自然の働きに驚きます。中でも、流水はもろろのこと、アムール川の水を運ぶ東樺太海流、日本海からの宗谷暖流、海水生成時にできる中層水がすべて合流する「知床の海」は、とてもダイナミックであり、親潮と西太平洋まで連なる豊かな海の源泉でもあります。この豊かな知床の海を守ることが、私たちの大切な使命に感じています。

委員の
三寺です



北海道大学低温科学研究所 教授
海域WGでは海洋環境全体の分類評価と海水分布状況および海中有害物質を担当しています。